

## 論文の内容の要旨

論文題目 大江文学における『第三世界』と日本』の表象  
——「アルジェリア戦争の時代」と『われらの時代』周辺作品を中心に  
**Representations of “‘Third World’ and Japan” in Oe’s Oeuvre—with a particular  
focus on *Our Time* and related works written in “the time of the Algerian War”**

氏名 ギュヴェン デヴリム チェティン (GÜVEN Devrim Cetin)

本論文では、非同盟の「第三世界」の形成期である「アルジェリア戦争の時代」に大江健三郎によって書かれ、あたかも一つの歴大な作品を構成しているかのように密接に繋がっている『われらの時代』を中心とする「見るまえに跳べ」、「喝采」、「セヴンティーン」、『叫び声』といった一連の作品を分析している。本論文には三つの目的がある。第一に、『われらの時代』を中心とする内的に有機的な繋がりを持つ一連の初期作品において、1950～60年代に形成されつつあった非同盟の「第三世界」という新たな政治的、経済的、文化的なカテゴリーと日本を対比し、この対比を基に自国を世界地図に再配置するという戦略を大江が取っていることを、細密なテキスト分析を通して明確に示すこと。第二に、本論文で焦点を絞った一連の小説が、ノーベル文学賞受賞により再確認された大江文学の世界化の過程にどのように貢献したかということを指摘すること。第三に、世界の「中心」の文学（西洋文学としての「世界文学」）と世界の「周辺」の文学（「第三世界」文学）それぞれと、大江文学との連動を、影響受容研究や対比研究双方を取り込んだ比較文学的方法を通して分析し明らかにするとともに、「世界文学」の地図において大江文学を位置づけなおすことである。

現在、「第三世界」と聞いて一般的に思い浮かぶイメージは、アジア、アフリカ、中・南アメリカに位置し、国民の人権や言論の自由を尊重しない、「国際社会」から部分的にあるいは完全に隔離した、独裁制・寡頭制によって治められている「三流の」「後進国」ないしは「途上国」のそれである。しかし、本論文で取り上げた大江文学作品においても捉えられているとおり、そもそもの「第三世界」は「後進国」を意味するものではなかった。「第三世界」は、資本主義体制と新植民地主義という支配形態に基づく「第一世界」とも、そして既成の社会主義体制としての「第二世界」とも異なる、「周辺世界」の民族による経済・政治・文化的「自立」と他の「周辺世界」諸国との「連帯」に依拠する新たな国際的「共同体」を築くための「第三の道」の探求であったのだ。本論文で分析した大江作品における「正真正銘性」= *authenticité* の探求のテーマは、この「第三の道」の探求という同時代現象に照応するものである。

「第三世界」という新たな地政学的なカテゴリーの形成過程の礎を築いた「始まりの現象」のひとつは、反植民地主義闘争としてのアルジェリア戦争（1954～62）だった。その後半が大江文学という「世界文学」における「始まりの現象」の形成期（1957～62）と重なりあっているこの時期を、本論文において「アルジェリア戦争の時代」と呼ぶことにした。これらの作品を対象とする先行研究で注目されていたのは「対米従属」というテーマであり、「第三世界」という要素は見逃されてきた。この「時代」に創作活動を始めた大江がいかにか、「第三世界」の観点から日本を、そして日本の観点から「第三世界」を見据えたかについて本論文で分析した。

方法論上の点で本論文は、大江文学の一連の初期作品を（当時の作品から現在の「晩年の仕事」にかけての大江文学をも念頭に置きながら）サイド流のポストコロニアル理論と、サルトル流の反植民地主義理論の観点から読み直す試みである。つまり、一方では大江健三郎の『『第三世界』と日本』の問題をテーマにする初期作品をサイドの主要な理論を通じて遡及的に位置づけなおした。他方、サルトルの「反植民地主義理論」・「第三世界」文学論をはじめとする仕事を、大江がどのようにこの一連の作品において意識しているかについて、影響受容研究の観点から分析した。以下に各章を簡単に紹介する。

第一章において「見るまえに跳べ」を取り上げた。「見るまえに跳べ」の題名と主題の参照先はW・H・オーデンの同名の詩である。この短編の独創性のひとつはオーデンの詩における *leap* と *look* の翻訳のあらゆる可能性を追求していることにある。この小説上で「翻訳」という方法が、テキストにおける「批評的思考」と「創造的思考」の区別を崩壊させるために用いられ、テキストにダイナミズムを与えているのだ。従来の「見るまえに跳べ」論では、「跳ぶ」は「政治的な参加」の、「見る」は「政治的離脱」の同意語として受け止められ、主人公の「ぼく」が政治的な行動を起こすことができないということが、「跳び」こむことができない「政治的離脱」の世代としての1950年代後半の日本青年の停滞状態を叙述するものとして読まれてきた。これに対して、本論文の論点は「見るまえに跳べ」における「政治的な参加」のモチーフにおいて大江が「見る」という要素の方にこそ重きを置いているところにある。「跳ぶ」ことは、全学連の性急な昂揚感に基づく行動を優先にする権威主義的な傾向を表す否定的な要素として位置づけられているのだ。主人公「ぼく」の世界に関する見解見識の未熟さという設定は、若き大江の日本の学生運動、特に全学連の世界に関するヴィジョンの物足りなさを捉える上での仕掛けである。大江が「見るまえに跳べ」で、「第三世界」指向の「周辺世界」の政治運動ではなく、「第三世界論」を掲げている欧米の学生運動だけをモデルにしようとした全学連における西洋中心主義的な帰趨を内部から批判していることを本章で明らかにした。

第二章では「喝采」を取り上げた。この短編で大江は、主人公・夏男にフランス語の *engager* を日本語に意識的に誤訳させることによって、この単語やその代名他動詞形である *s'engager* の政治的と性的な意味を孕む多義性を解放している。作者の意図は、サルトルの「<sup>オクタン・テイック</sup>正真正銘性」という概念と深く関わっている「政治的な参加」という概念と、アルジェリア解放戦争をはじめとする「第三世界」指向の運動との関わりについて考えさせることにある。このような考察によって、読み手は、「周辺世界」における「第三世界」指向の「政治的な参加」の覚醒と同時代における自国の関係を位置づけなおすことになる。本章ではバルザック『あら皮』における一連のイマージュや表現を大江が日本語に翻訳しなおす形で引用し、原文と、翻訳と、自らの文体とを拮抗させることによって、自らの作品の文体の多様化・深化を図ったことをめぐっても論じた。

第三章と第四章においては『われらの時代』に焦点を絞った。日本青年による「正真正銘」な自己同一性の探求であったと規定することができる反新植民地主義的な市民運動＝安保闘争が始まろうとしていた「時代」に書かれた『われらの時代』には、英米仏文学など「世界文学」のテキスト（とりわけD・H・ローレンス『チャタレイ夫人の恋人』、H・ミラー『冷房装置の悪夢』、J・ケルアック『路上』）への言及が多い。第三と第四章では、この作品において大江がいかにか一連の「世界文学」のテキストを物語内容のレヴェルで『『第三世界』と日本の対比』という共通

項とさらにダイナミックに連動させ、新植民地主義と拮抗し対立する「第三世界」という同時代現象の文脈に移転させたかについて述べた。

第五章では大江が『われらの時代』、「セヴンティーン」や『叫び声』において動員した「怪物」というイメージを取り上げた。「怪物」はサルトルの概念であり、自らの土着の言語・文化と、メトロポリタン・センター宗主国中枢の国語・文化の間で板挟みとなっているネグリチュードの作家らのハイブリッドな自己同一性を叙述する上で用いられている。そもそも、西洋文学における「怪物」は「周辺世界」の民族に対する差別的な「姿勢と言及の構造」の一変種に過ぎない。しかし、「第三世界」文学において「怪物」というイメージは、肯定され、帝国主義に言語のレヴェルで逆らう上で転用される。この *monstre* という単語を選択するにあたってサルトルは、その語源であるラテン語の *monstrare* という動詞が「見せる」、「明視させる」、「露呈させる」という意味を持っていることを意識していた。サイドも指摘したとおり、「怪物」的な作中人物というものは、「第三世界」文学の特徴のひとつである。多くの「第三世界」文学の作家らが帝国主義や自国の政治社会的な問題を「露呈」させる (*monstrare* する) 方針で創作・言論活動を行っていることからすると、「怪物」というイメージの採用において大江のスタイルは、1950～60年代に活躍したスーダンのタイプ・サーレフやナイジェリアのエイモス・チュチュオーラのような「第三世界」文学の作家らと相似している。

結論では、本論文で行ってきた分析に基づき、世界文学の地図における大江健三郎の実際の位置が、「第三世界」とその文化に深い共感を示しながら自国の帝国主義への関与を（自己）批判しつづけた（反植民地主義理論の創始者としての）フランス人のサルトルや、（ポストコロニアル理論の創始者としての）パレスチナ系アメリカ人のサイドの位置と重なるところにあることを開示した。また、「アルジェリア戦争の時代」に書かれた『『第三世界』と日本』をテーマにする一連の大江作品における「第三世界」のイメージが、大江文学の世界化の道程において重要であった『個人的な体験』と『万延元年のフットボール』、そしてこの二作と深い繋がりを持つエッセイ『ヒロシマ・ノート』と『沖縄ノート』を経て「後期の仕事」レイト・ワークまでにかなる形で登場しつづけたかということにも言及した。